
Iris

さ月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Iris

【コード】

N0715M

【作者名】

さ月

【あらすじ】

組織との決着が付いた後、ロンドンでお互いの気持ちを確認め合った新一と蘭。しかし蘭に病魔が忍び寄り…。目覚めない蘭と新一、志保のショートストーリー

「よし！今度は俺が鬼だ！」

ガッツポーズをする体躯の良い少年。

「ああ…また犯人役ですか…」

がつくりと肩を落とす、賢そうな顔にそばかすを浮かべた少年。

「良いじゃない、隠れるのも楽しいわよ！」

苦笑気味に笑うカチューシャをした少女。

暖かな日差しが射す午後、公園では元太、光彦、歩美がかくれんぼをして遊んでいた。

歩美は何気なく、公園の入り口を見ると、その前の歩道を一人の女性を通り過ぎて行った。

「あれ…？」

歩美は言葉を漏らす。

「どうしたんですか？歩美ちゃん」

その様子に光彦が問いかける。

「いた！いたんだよ！」

光彦と元太に満面の笑みを見せる。

「いたって、誰がだよ？」

元太が眉間に少し皺を寄せ不審気に言う。

「あのね」

歩美が続けた名前に元太と光彦は目を丸くした。

「園子さんところやって歩くの、久しぶりですね」

色黒で、左眉の端の辺りに絆創膏をした男：京極真が言う。

「そりゃそうよ！真さん、いつも海外に行っちゃっていないんだから！」

園子は不満を漏らす。

「ま、私もパスした事あったし…」

園子の顔が少し曇る。

「園子さん……」

真は知っている。園子の顔が曇った理由も、「あの時」からの彼女の気持ちも……。

園子と真は人通りの多い街中を歩いていた。

休日の為か、若者の姿が多い。

カップルで歩く男女、友人達でわいわい喋りながら歩く者達、携帯を操作しながら歩く者、急いでいる者など、様々だ。

「あれ……？」

園子は道路を挟んだ向かいの歩道に一人の女性を見止めた。

その女性は先程、歩美が見掛けた女性である。

園子はその女性を前にも見たような気がしていた。

「どうかしました？」

向かいの歩道を見つめている園子に真は声を掛けた。

「ううん！何でもない！早く行かなきゃ、間に合わないわよ！」

園子は真の背中を押して、先を急いだ。

（気のせい……よね……？）

1度だけ、女性がいた場所を見て。

（ちょっと遅くなっちゃたかしら……）

英理は急ぎ足に歩きながら、腕時計を見て思った。

病院の休日前日だからか、受診を待つ人々が待合ロビーに多くいる。英理がもう少しで病院の出口という所まで来た頃、少し離れた場所にある一人の女性を見つけた。

その女性は元太、歩美、光彦、園子が見掛けた人物だ。ただ、彼らが見た時には持っていなかった花束が手に収められていた。

（ん……？あら？あの子……）

英理には彼女に見覚えがあった。

ピリリリ……

声を掛けようかとそちらに行きかけたが、丁度、電源を入れたばかり

りの携帯が鳴った。

「はい、もしもし。栗山さん？」

「先生！今どこです？早く帰ってきて下さらないと依頼人の方が来てしまいますよ！」

電話の主、栗山緑が早く帰って来いと催促する。

「ごめんなさい、栗山さん、まだ病院なのよ。すぐ帰るわ！」

英理は電話を切って、一瞬、彼女を見た所を再び見て、病院を出た。

402号室。

花束を持った女性はその号の病室を軽くノックし、中へ入った。

「あ……」

女性は小さく声を漏らした。

そこには工藤新一がいた。

病院のベッドではなく、ベッドの横に置かれた椅子に座って。

「あ……宮野、お前……。いつアメリカから!？」

新一は驚きの表情をする。

志保は構わず、つかつかと病室入り口から中へ入ってくる。

「今朝、帰ってきたの。両親の命日がもうすぐだから……」

志保はベッド脇に置かれた台に花束を置く。

「そっか……。でも一言連絡しても良いだろ？」と言う新一。

「蘭さん、目覚める気配ないの？」

そんな言葉を無視し、この病室の主……ベッドに横たわり、人工呼吸器を付け、固く目を閉ざした毛利蘭を見て志保は言った。

「ああ……。あれからずっと変わらないよ……。医者も、目覚める確率は低いって言ってるしな……」

新一は蘭を見て言った。その目は物悲しげである。

志保は、少し痩せたかもしれないと新一に思った。

「そう……」

組織との決着が付き、灰原の頑張りで解毒剤ができ、元に戻った新一は蘭を誘ってイギリスのロンドンへ向かった。

そこでお互いの気持ちを確認合った直後、蘭が倒れてしまい、一命は取りとめたものの、以来、意識が戻っていない。

「あ、お前、いつまでこっちに居るんだ？」

新一は思い出したように志保に問う。

「今度アメリカに行ったら、しばらくこっちに戻れそうにないから一週間程はいるつもりよ」

志保はもう一脚あった椅子に腰を下ろして言った。

「なら、これやるよ」

新一は上着のポケットから一枚のチケットを出した。

「これ…」

志保はチケットを受け取り、見た。

そのチケットは今度放映される、サッカー映画の試写会のチケットだった。

「知り合いに貰ったんだけど、丁度用が入っちゃったし…」

行く気分にはなれないしな…と新一は続けた。

「…ねえ、あなた知ってると思うけど、私サッカーには…」

「比護さん、その試写に来る予定なんだとよ」

あまり興味がない、と言おうとした志保を、予測してかせずか、遮って新一は言った。

「え…比護さんが？」

志保は少し驚いた。試写会に有名人や出演者が出席する事は少なくないが、まさか比護さんが出るとは…！

「ああ。サッカー選手のゲストとして、呼ばれてるらしいぜ」

「そう…。とりあえず貰っておくわ。ありがと」

志保はあまり表情を作らず言う。

しかし、内心、比護を間近で見られるかもしれないと思うと嬉しい志保であった。

「ハハ…（相変わらず可愛くねーやつ）」

新一は苦笑しながらそんな事を思った。

プルルル…

携帯の着信音が鳴る。

「お！電話」

新一は上着の内ポケットから携帯を取り出した。

「ちよつと！病院では切つときなさいよ」

携帯の電源を入れつ放しの新一に注意する志保。

「悪いい、悪いい！ちよつと出てくるな」

新一は左手を顔の前に持つてきて誤り、そのまま病室を出て行った。ベッドで眠る蘭と志保の2人だけになった病室に静寂が訪れた。

志保は椅子を立ち、蘭の顔をよく見た。

その顔は志保が知っているモノと何ら変わりなく…。

ただ、その目は堅く閉じられている。

「目覚めなきやダメよ…。みんながあなたを待つてる。ご両親も、友達も、小嶋君達も、もちろん私も…。そして…誰よりも工藤君が…。だから、もうそろそろ目を開けても良いんじゃないかしら…。

ねえ？蘭さん…」

蘭の頬に志保の手がゆっくりと触れた。

午後の暖かな陽の光が病室を明るく照らす。

（ちよつと長引いたか…）

新一はそう思いながら、小走りで蘭の病室へと急ぐ。

（ん…？）

少し離れた前方に志保がいた。

しかし、すぐにやって来たエレベーターに乗ってしまい、その姿を消した。

（アイツ…何も言わないで帰んのかよ…）

新一は半眼になりつつ思った。

そして、蘭の病室の扉を開け、中に入る。

そして。

最初、新一は理解できなかった…いや、思考が一瞬止まった。

それはあれからずっと、願って願って、願いまくった、その光景が

見えたから…。

蘭が目を開けている。蘭がこっちを見ている。

夢ではなく、本当に…。

立ち止まったままの新一に蘭が何か言った…いや、正確には唇を動かした。声は出ていない。

ずっと声を出していなかった為、出せないのだ。

それは「しんいち」と言っているようで…。

「蘭！」

新一は急いで蘭の側に行き、彼女の手を取り、もう一度名前を呼ぶ。

蘭ももう一度、目の前にいる人の名を、声にならない声で呼ぶ。

蘭の眼に涙が溢れる。

新一は蘭の手を今一度握りしめた。

そのほっそりとした手を優しくもしっかりと。

(後書き)

ふっと頭に浮かんだので書いてみました。

です、色々と粗が…。

蘭の植物状態、最初は組織に受けた衝撃が元で…という事にしようとしていたのですが、あまりにもなので病気にしました。

出てきていないキャラも出したかったです(小五郎や警視庁メンバーなど)、量やシチュエーションの問題で出せなかったです…すみません…。

感想でも評価でも頂ければとても嬉しいです。

最後まで読んで頂き、本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0715m/>

Iris

2010年12月30日01時52分発行